

## 平成22年度 生体制御学科同窓会 講演会要旨

### 講演1

#### 「基礎生物学者からみた下垂体研究の歴史と展望」

埼玉大学名誉教授 井上金治

下垂体は神経系と内分泌系の情報伝達のインターフェースとして働き、動物の生体調節に重要な役割を持つ大変重要な内分泌器官です。私は群馬大学内分泌研究所から埼玉大学において30年以上もの間、下垂体の研究を行ってきました。この間、短期間ではありますが、視床下部一下垂体系の発見に多大な功績を残した有村博士とともに過ごすことができ、ノーベル賞に輝いた視床下部因子がどのようにして発見されたかを知る機会に恵まれました。そして、埼玉大学ではオーファン GPCR のリガンドとして発見された新規物質が、向下垂体性視床下部因子を制御する脳内ペプチドであることを明らかにし、視床下部一下垂体系の理解を一步進めることができました。本講演ではこれらの研究を通じて感じた基礎研究の意義について私見を述べます。また、昨今の理学部における状況と、理学研究の今後の展望などについて話したいと思います。

### 講演2

#### 「世界のどこか・・・が、私の仕事場」

生体制御学科1期生 国際協力コンサルタント 坂井茂雄

私は生体の1期生で、埼大に入学したのは、1977年4月です。時の経つのは早いもので、30年以上も昔の話になってしまいました。受験したときは、新学科の予算が承認されておらず、生体制御学科ではなく「生化B」となっていて、そんな背景もあり同級生にも面白い人が多かったように思います。

大学は4年で卒業しましたが、勉強には熱心ではなく、その意味で当時の先生方には大変お世話になりました。学生時代には、教室や研究室ではなく、サークル小屋(当時)とか飲み屋で時間を過ごしていたように思います。大学を卒業する時には、進学も就職もしませんでした。当時の日本は今と違い「高度成長時代」の後半であり、就職すること自体はそれほど難しいことではなく、危機感に乏しかったように思います。ともかく、そんな感じで私のキャリアが始まってしまいました。

その後、青年海外協力隊員としてケニアで理科や数学の教師をしたり、公立中学校の理科教師になったり(3年で辞めましたが・・・)、アメリカの大学院で環境学や経済学を学んだり、国際機関に勤めたりしました。現在は政府開発援助関係のコンサルタントをしています。

今回の講演(話)では、

- 私の仕事の様子
- 政府開発援助（ODA）のこと
- 現在の仕事に至った経緯

そして、

- 学生の皆さんへのアドバイス
- を考えています。

私の話は、前途有望な学生の皆さんには、あまり参考にならないような気もしますが、「愚か者は人の成功体験の真似をして失敗し、賢い者は人の失敗例を学んで成功する」と言いますので、逆説的に何らかのヒントになればと期待しています。